

令和7年度 香川県立農業大学校 学校評価

評価 A：十分達成できている、B：おおむね達成できている、C：どちらかという達成できていない、D：ほとんど達成できていない

\*下線部は将来ビジョン記載関連事項

重点目標	評価項目	具体的方策・評価指標等	経過・実績	評価	次年度の課題と改善策	外部評価委員の意見
I 学生の確保	1 学生・研修生の応募者確保	<p>●具体的方策</p> <p>1 高校生及び高校の進路指導教諭への積極的な働きかけ</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・分かりやすい学校案内・募集要項等の作成・配布</li> <li>・県内37高校の進路指導担当者を訪問し、就職・進学の動向等を聞き取り調査</li> <li>・高校進路ガイダンスへの積極的な出席</li> <li>・農業高校と連携した農大見学会の提供</li> </ul> <p>2 情報発信の強化</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ホームページの充実と学校の出来事などの積極的な情報発信</li> <li>・SNSを活用した情報発信の充実</li> <li>・県広報誌や広報媒体を活用した学生・研修生募集記事の掲載</li> </ul> <p>3 公開講座・研修等の開催と応募方法のオンライン化</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・体験型オープンキャンパスの複数回実施とオンライン申込による参加促進</li> <li>・入学試験受験料のデジタル収納による利便性向上</li> <li>・積極的な公開講座・研修の開催による農大のPR</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校案内と募集要項、オープンキャンパスのチラシ及びポスターを作成し、県内高校、市町、JA等に配布するとともに、県下44高校のうち、農業高校を含む37校を訪問して説明を行い、就職・進学の動向などを聞き取りした。</li> <li>・県内5校で実施された進路ガイダンス（のべ6回）に参加し、農大の特徴や卒業後の進路等について情報提供したほか、体験型ガイダンスでは、簡易な土壌診断や病気の診断体験などを行い、農大へ興味を持ってもらえるように働きかけた。</li> <li>・12月には令和9年度入学に向けた取り組みとして、石田高校と連携して高校2年生を対象に農大見学会を試し、農大での学びに興味を持ってもらえるよう、農大生による実習説明や農業機械の紹介などを行った。</li> <li>・情報発信委員会を中心にホームページの充実や積極的な情報発信に努めた。農大のできごとについて年間計画を作成し、定期的な情報発信を進めた。</li> <li>・農大のSNSや農業経営課のSNSを活用して情報発信を行った。また、積極的に学生からの投稿を促し、学生の投稿数は昨年の2倍となった。 (Facebook・Instagramの投稿82件、うち学生の投稿19件)</li> <li>・学生・研修生の募集について、農大ホームページや県広報誌への掲載などを行ったほか、入学式・卒業式や卒業論文発表会などの学校行事はもちろん、小学生の収穫体験や学生が行った料理教室などの取り組みについても報道提供し、マスコミを通じた広報を行った。</li> <li>・体験型オープンキャンパスを6回計画し、実施済みの5回の参加者は延べ174名、うち学生87名であった。希望する専攻コースを体験してもらい、受験予定者に専攻コース選択の機会を提供できた。(残る1回は3月7日に開催予定)</li> <li>・令和7年度の受験者向け説明会を1回(参加者25組51名)開催し、募集要項の詳細な説明を行ったほか、在校生が受験予定者に農大の魅力伝えて受験を促した。</li> <li>・担い手養成科のオープンキャンパスや研修科が行う公開講座や農大見学会のオンライン申込を受け付け、約4割がオンラインでの申し込みとなった。</li> <li>・今年度から入学試験受験料等のデジタル収納に取組み、担い手養成科で1件、技術研修科で32件(利用率11%)となった。</li> <li>・スマート農業やパイプハウスの移設研修、環境にやさしい農業生産についての公開講などを開催(のべ106名参加)し、外部の農業者や就農希望者へ農大のPRを図った。</li> </ul>	<p>A</p> <p>B</p> <p>A</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・来年度もできるだけ多くの高校を訪問し、進路指導の先生に農大をPRする。</li> <li>・チラシ等に工夫を加えて配布し、オープンキャンパスへの参加を促す。</li> <li>・募集要項を送付する際に、各校の進路ガイダンスへの参加を依頼する。</li> <li>・<u>農業高校を対象に、生徒・先生に理解を深めていただけるよう、農大を訪問する機会を提供し、進路の一つとして認知してもらう。</u></li> <li>・情報発信委員会が中心となって計画的なホームページの更新、SNSの発信、広報誌への掲載活動を行う。</li> <li>・SNSでの発信の際には、動画や、学生からの投稿を増やし、臨場感、わくわく感を伝えて農業大学校の魅力をPRする。</li> <li>・学校行事や小学生の農業体験などを積極的に報道提供し、マスコミを通じた広報を計画的に実施する。</li> <li>・引き続き体験型オープンキャンパスの複数回実施を継続するとともに、できるだけ技術研修科の農大見学会との同時開催とし、半年、1年、2年とニーズに合わせた学びができる農大の良さを知ってもらう。</li> <li>・引き続き、オンライン申込の取り組みを広げるとともに、受験料や受講料、をデジタル収納で行えることをPRして、受講者の利便性向上を図る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学生数が少ないことで濃密な個別指導や一人当たりの実習時間が増える等、少人数制のプラス面を評価する考え方もあるのではないかと。</li> <li>・試行的に行った高校と連携した農大見学会では、農大のことがよく理解できた様子であった。生徒は「知らないから行かない」ので、知っていることは大事な点である。他の農業高校へも広げていってほしい。</li> </ul>

重点目標	評価項目	具体的方策・評価指標等	経過・実績	評価	次年度の課題と改善策	外部評価委員の意見																																									
		<p>4 農業に興味がある社会人への積極的な働きかけ</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>農大見学会（研修科オープンキャンパス）の複数回実施と参加の働きかけ</li> <li>農大見学会や農業初心者向け農業基礎講座から準備研修や実践研修への誘導</li> <li>受講希望者のニーズに応じた研修内容の検討</li> </ul> <p>●評価指標</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>オープンキャンパス参加者数</li> <li>担い手養成科応募者数</li> <li>技術研修科応募者数</li> </ul>	<p>・7月と11月に、農業を始めたいと考えている人を対象とした「農業基礎講座@農大 ナイトスクール」を開催した。どちらも、働きながら学べるよう、金曜夜間の座学5回と土曜午後の実習1回をセットで行っており、7月は21名、11月は19名が参加して、野菜等の栽培技術や土づくり、病虫害防除などの基礎を学んだ。</p> <p>・研修科オープンキャンパスとして農大見学会を3回実施し、延べ36名が参加した。このうち9名が農大の就農準備研修や準備研修等に応募した。</p> <p>●実績</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>オープンキャンパス参加者数</li> <li>担い手養成科 学生 87名、父兄等 87名（合計 174名）</li> <li>技術研修科 36名</li> <li>担い手養成科応募状況</li> </ul> <table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>応募者数</th> <th>合格者数</th> <th>入学予定者数</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>推薦入試</td> <td>22人</td> <td>22人</td> <td>22人</td> </tr> <tr> <td>一般入試(前期)</td> <td>2人</td> <td>2人</td> <td>2人</td> </tr> <tr> <td>一般入試(後期)</td> <td>-</td> <td>-</td> <td>-</td> </tr> <tr> <td>合計</td> <td>24人</td> <td>24人</td> <td>24人</td> </tr> </tbody> </table> <p>・技術研修科応募状況</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>応募者数</th> <th>合格者数</th> <th>入校(予定)者数</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td rowspan="3">7年度</td> <td>就農実践研修</td> <td>16人</td> <td>14人</td> </tr> <tr> <td>就農準備研修Ⅰ期</td> <td>12人</td> <td>12人</td> </tr> <tr> <td>就農準備研修Ⅱ期</td> <td>20人</td> <td>18人</td> </tr> <tr> <td rowspan="2">8年度</td> <td>就農実践研修</td> <td>14人</td> <td>-</td> </tr> <tr> <td>就農準備研修Ⅰ期</td> <td>17人</td> <td>-</td> </tr> </tbody> </table>		応募者数	合格者数	入学予定者数	推薦入試	22人	22人	22人	一般入試(前期)	2人	2人	2人	一般入試(後期)	-	-	-	合計	24人	24人	24人		応募者数	合格者数	入校(予定)者数	7年度	就農実践研修	16人	14人	就農準備研修Ⅰ期	12人	12人	就農準備研修Ⅱ期	20人	18人	8年度	就農実践研修	14人	-	就農準備研修Ⅰ期	17人	-	A	<ul style="list-style-type: none"> <li>今後も研修科オープンキャンパスの複数回実施を行うとともに、できるだけ担い手養成科との合同開催とし、高校や保護者を通じて、広く農業に興味のある県民へのPRを図る。</li> <li>引き続き農業に関心がある県民に広く門戸を開き、初歩的な講座から実践的な講座へ、対象者の意向にあった研修へステップアップを促す。</li> <li>広く研修生を呼び込むため、移住施策関連部局や自衛隊等と連携して新たなチャンネルの開拓を目指す。</li> </ul>	
	応募者数	合格者数	入学予定者数																																												
推薦入試	22人	22人	22人																																												
一般入試(前期)	2人	2人	2人																																												
一般入試(後期)	-	-	-																																												
合計	24人	24人	24人																																												
	応募者数	合格者数	入校(予定)者数																																												
7年度	就農実践研修	16人	14人																																												
	就農準備研修Ⅰ期	12人	12人																																												
	就農準備研修Ⅱ期	20人	18人																																												
8年度	就農実践研修	14人	-																																												
	就農準備研修Ⅰ期	17人	-																																												
	2 学生・研修生のニーズや将来ビジョンに即した環境整備	<p>●具体的方策</p> <p>1 学生・研修生へのアンケートによるニーズの把握</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>施設等の満足度調査の実施</li> </ul>	<p>・今年度の学生に対し、施設等の満足度調査（5点満点）を行ったところ、パソコンの利用環境については3.7、教室や実習の設備については4.0の評価で、主な意見としては、「建物が古い」、「3階のトイレを新しくしてほしい」、「暑さ対策がもう少し欲しい」等があった。</p> <p>・令和5、6年度に行った研修生からのアンケートをまとめ直した。主な要望としては、「もっと機械の練習がしたかった」、「先進農家での研修、流通・販売の見学がもっとあるとよかった」、「有機栽培や土づくりについてもっと学びたかった」、「米麦や自分のコース以外の品目も体験したかった」、「就農について定期的に相談できる体制があればよかった」等があった。</p>	A	<ul style="list-style-type: none"> <li>引き続き、満足度調査やアンケートを行い、学生・研修生のニーズの把握を行い、教育環境の改善に生かす。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>アンケート結果では、学生はハード的、研修生はソフト的なニーズがあるようだが、ソフト面については、次年度からでも改善できるものがあるのではないか。</li> </ul>																																									

重点目標	評価項目	具体的方策・評価指標等	経過・実績	評価	次年度の課題と改善策	外部評価委員の意見
		<p>2 農業大学校将来ビジョンの作成</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>農業大学校将来ビジョン検討委員会の開催とビジョン作成</li> <li>県外の農業大学校の状況調査</li> </ul> <p>●評価指標</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>農業大学校将来ビジョンの作成</li> <li>教育施設や備品の整備数</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>現在の場所に開設して 50 周年を令和 9 年度にむかえることから、100 周年を見据えた農業大学校のありかたについて、農業者や関係機関等の外部の委員 9 名による農業大学校将来ビジョン検討委員会を開催した。</li> <li>第 1 回検討委員会(4/21)を開催し、現状と課題を説明後、校内を回り、「施設が古い」、「ほ場が小さく現場の栽培に合わない」、「出口を含め学生に魅力的な姿を見せる必要がある」等多くの意見をいただいた。</li> <li>第 2 回検討委員会(7/8)では、入口対策の優良事例として、熊本県立農業大学校の「農高・農大一環プロジェクト」や他県の状況について調査した結果を報告し、「農業高校や関係機関、農業法人等と連携する仕組みづくりが必要」、「実践的な教育が必要」などの意見をいただいた。</li> <li>他県の事例調査として、徳島県立農林水産総合技術支援センター農業大学校へ先進地調査(9/7)を行い、施設見学とともに、学生法人の運営や農業試験場との統合メリットなどについて調査した。</li> <li>第 3 回検討会(11/12)を開催し、「香川県立農業大学校将来ビジョン」を取りまとめた。参考資料 1 参照</li> </ul> <p>●実績</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>農業大学校将来ビジョンの作成 令和 7 年 11 月</li> <li>令和 7 年度整備数 8 件 (県予算)</li> <li>花き温室の温風機 (2 台)、重量選別機 (1 台)、動力噴霧器 (1 台)、一輪管理機 (1 台)、フレールモア (1 台)、運搬車 (1 台)、買田圃場トイレ改修 (1 件)</li> </ul>	A	<ul style="list-style-type: none"> <li>農業大学校将来ビジョンを実現するため、来年度から本格化する農大の再整備事業において、<u>校舎改修等の施設整備に向けた関係機関との調整を進め</u>、学生・研修生の意向に沿った整備計画の作成、短期的な取り組みを着実に行う。</li> <li>学生・研修生のニーズに応えるため、国補事業への取り組みや予算要求による備品等の整備に取り組み、継続的な教育環境の改善を図る。</li> </ul>	
II 教育内容の充実・強化と実践力の養成	1 教育内容の見直しと充実	<p>●具体的方策</p> <p>1 教育内容の見直しと抜本的な施設整備の検討</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>農業大学校将来ビジョンの検討と作成</li> <li>近隣の農業大学校の職員と意見交換と情報収集</li> </ul> <p>2 ニーズに応じたカリキュラムの編成</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>学生及び研修生のニーズや、就職先から求められる資質の把握</li> <li>ニーズや今日的課題に対応したカ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>校内の教育・研修委員会において、将来ビジョンに必要なアイデアを出し合い、短期的な取り組み (2~3 年) と長期的な取り組み (3 年~) に分けて、整理し、将来ビジョン案として作成と検討を進めた。また、来年度から本格化する農大再整備事業に向け、教育・検討委員会を定期的に開き、根拠資料の作成などを進めている。</li> <li>第 2 回ビジョン検討会において優良事例としてオンラインで参加いただいた熊本県や、先進地調査に訪問した徳島県の担当者との意見交換を行った。また、中国四国ブロックでの担当者会等でも各県の状況などを聞き取りしたほか、各県の担当者が必要に応じて電話やメールで情報収集を行った。</li> <li>各講義に関して 5 段階評価でアンケートを行い、数字が大きいほど難しいと感じる難易度は 3.0~4.0、数字が大きいほど評価が高い総合評価は 2.7~4.1 と科目による差はあるものの、平均はどちらも 3.3 で、概ねちょうどよいとの評価であった。</li> <li>就農・就業ガイダンス (合同会社説明会) の機会をとらえて、参加企</li> </ul>	A  A	<ul style="list-style-type: none"> <li>教育・研修委員会において、将来ビジョンの実現のために必要となる施設や施設設備、教育内容等について具体的に検討し、<u>農大再整備基本計画の作成に向けた取り組みを進める</u>。</li> <li>近隣の農業大学校の職員との意見交換や先進的な取り組みを参考にし、学校運営やカリキュラム編成について積極的な取り組みを進める。</li> <li>アンケート結果等を踏まえ、より満足度の高い授業や実習となるよう、外部講師やコース教授、各部門との打合せ機会を増やし教育内容の充実を図る。</li> <li>農業大学校に導入した機械、施設等を</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>学生は、農作物の栽培技術を中心に出荷まで学んでいるようであるが、生産物の販売も含めて学ぶことも重要ではないか。</li> </ul>

重点目標	評価項目	具体的方策・評価指標等	経過・実績	評価	次年度の課題と改善策	外部評価委員の意見
		<p>リキュラムの見直し</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>栽培管理から農業機械、経営管理、流通販売に至る幅広い知識・技能の修得促進</li> </ul> <p>3 指導教官の資質向上</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>各種研修会や研究活動への積極的な参加</li> <li>最新の教育事情、学生指導等に関する研修や情報交換等の実施</li> </ul> <p>●評価指標</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>カリキュラム等見直しポイント数</li> <li>指導職員の研修参加延べ人数</li> </ul>	<p>業の担当者に対し、求める人材について聞き取りしたところ、「素直」、「真面目」、「熱意」、「即戦力となる基礎的知識や資格」という意見が多かった。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>アンケート結果や今日的課題をふまえ、農業大学校将来ビジョンの実現に向けて、農業技術・知識の習得や現場力と経営力の育成を図るため、校内の教育・研修委員会において検討を重ね、カリキュラムの見直しを行った。見直しポイントは以下の6つ。 <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 夏季休暇期間の前倒し 夏の暑さ対策として、香川県で猛暑日が多い7月中旬～8月下旬が夏季休暇となるように、休暇期間を前倒しし、7月11日～8月31日を夏季休暇とする。</li> <li>2) 1学年「現場実習（旧農家実習）」の充実 非農家出身者や農業高校以外からの入学者が増えており、地域の農業情勢を知ることが就農に際して重要であることから、普及センターと連携し、現場実習に地域農業を学ぶ機会を加える。</li> <li>3) 2学年「専攻実習」の充実 1, 2年生の親睦を図るため、学校外で実習を行う学生も毎週月曜は校内で実習しているが、来年度は、これを月1回とし、現場での実習機会の充実を図る。</li> <li>4) 実践的な機械操作練習の新設（実習時間を活用して） 大特免許取得を目指した運転練習が主で、ほ場での機械操作練習は限定的であったので、来年度は、担い手養成科、技術研修科の実習日を活用して、数名ずつ練習する機会を設ける。</li> <li>5) 農業機械操作実習とフォローアップ研修の充実 国補事業を活用し、香川県に合ったスマート農業技術を導入した栽培実習をフォローアップ研修（公開講座）として開催し、多様な農業人材も含めて幅広く担い手を育成する研修の充実を図る。</li> <li>6) 有機栽培で対応できる技術の実習を導入 有機栽培ハウスを設定し、座学講義に加えて有機栽培を学ぶ実習を技術研修科中心に行う。</li> </ol> </li> </ul> <ul style="list-style-type: none"> <li>中国四国ブロック教務担当者会及び西日本ブロック農業者研修教育施設指導職員「野菜部門」研修会に出席し、情報交換を行った。</li> <li>全国の農業大学校の指導者研修に1名が参加し、人材を育てる授業力と教員力について学ぶとともに、全国の指導者と情報交換した。</li> <li>県の発達障害支援センターが主催するベーシック研修を1名が受講し、発達障害支援について学んだ。</li> </ul> <p>●実績</p> <p>見直しポイント数 6ポイント 研修参加延べ人数 8名</p>	B	<p>有効活用して、スマート農業や有機農業など今日的な課題に対応した教育内容の充実とともに、多様な農業人材も含め、幅広く担い手を育成する研修の充実を図る。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>学生・研修生のニーズに応えるとともに、農業大学校将来ビジョンの実現に向けて、カリキュラム等の見直しポイントが円滑に実施できるよう、事前準備、関係者との連携などに計画的に取り組む。</li> </ul> <p>・引き続き中四ブロックや西日本ブロック、全国規模の農大職員対象の研修会・研究会に加え、最新の農業技術や学生指導に関する研修会に参加するなど、積極的な自己研鑽を促進する。</p>	

重点目標	評価項目	具体的方策・評価指標等	経過・実績	評価	次年度の課題と改善策	外部評価委員の意見
	2 実践研修の充実	<p>●具体的方策</p> <p>1 農場実習や専攻実習での自主的な取組みを促進</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>農場実習等を通じた責任感や指導力の修得</li> <li>生産現場で求められる基礎的な技術・能力の修得</li> </ul> <p>2 校外での実習体験の積極的な推進</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>農家実習等の校外実習の機会を増やし、人間性・社会性を育成</li> <li>実際の農業生産・流通販売現場の体験等の幅広い研修機会の提供</li> </ul> <p>3 就農や就職に有利な資格の取得促進</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>各種資格試験等の情報提供と積極的な取得支援</li> <li>共通する資格のカリキュラム化と実習時間を活用した専門資格の取得支援</li> </ul> <p>●評価指標</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>学生・研修生全員の校外実習体験</li> <li>資格取得学生・研修生の延べ人数</li> </ul>	<p>●実績</p> <p>校外実習 担い手養成科1年生17名、2年生12名 研修科研修生13名 資格取得 学生延べ160名 研修生延べ61名</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>実習において、2年生には1年生への指導や作業計画の説明をさせることなどにより、自主性や責任感の醸成、指導力の修得に努めた。</li> <li>野菜園芸コースを中心に、栽培品目の選定、栽培計画の作成を学生に行わせることで、主体的に播種から収穫までの栽培管理を考えるようになってきている。</li> <li>2学年の専攻実習については、学生の意向を踏まえて希望する実習先を選択させ、12名が校外（先進農家8名、農業試験場2名、畜産試験場2名）で取り組んだ。</li> <li>1学年の農家実習を前期と後期の2回実施し、前期、後期各5日間実施し、先進農家等延べ20か所に各1～4名、17名全員を派遣した。</li> <li>就農実践研修生13名が希望する品目の先進農家で実習を行った。</li> <li>担い手養成科はすでに農業生産・流通現場の見学を行っているが、今年度は技術研修科でも生産流通販売現場の研修として、農業試験場や市場の見学を行った。</li> <li>面談時や資格取得のためのガイダンスにおいて、学生に在学中に取得可能な資格について周知し、資格取得を促した。</li> <li>昨年度に引き続き刈払い機の安全講習を必須資格として授業計画に組み込んだほか、大型特殊自動車免許（農耕者限定）も、実習日に講習が受けられるよう各専攻コースの職員と調整し必修とした。</li> <li>実習の受入先の選定については、事前に学生・研修生の意向等を把握したうえで調整し、より効果的な実習の実施に努めた。</li> <li>就農・就業後に役立つ資格を中心に、16種類の資格取得に延べ221人がチャレンジした。</li> </ul>	<p>B</p> <p>A</p> <p>A</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>教育・研修委員会や教務担当者等で指導方法などを共有し、2年生が農場実習でのリーダーとなり1年生を指導することで、リーダーシップを身に着けるように仕向ける。</li> <li>要望が高い<u>農業機械の基本的操作について、操作練習の時間を設ける。</u></li> <li>1年生の農家実習については、<u>農業士や里親と連携して、受け入れ先リストの充実を図るとともに、米麦の実習も経験できるよう時期を調整し、実習の充実を図る。</u></li> <li><u>生産から販売までの幅広い研修機会を提供するため、来年度から農大での直売再開に向けて取り組む。</u></li> <li><u>在学中の積極的な資格取得に向け、資格取得のチャンスを逃さないよう、入校者ガイダンスや前期・後期ガイダンスの場を利用して周知と意欲喚起に努める。</u></li> <li>引き続き、刈払作業従事者安全衛生講習、大型特殊免許（農耕車限定）講習については、<u>基本的に全員必須の資格とする。</u></li> </ul>	
III 進路指導の充実と就業意欲の醸成	1 進路決定の指導・支援	<p>●具体的方策</p> <p>1 個別の進路相談の実施と情報提供</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>三者面談や個別指導による就職活動状況の把握と進路指導</li> <li>関係機関との連携による就職活動の支援や求人情報の把握</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>5月中旬に1学年全員に三者懇談を実施し、希望する進路や取得すべき資格等の情報共有を図った。2学年は4月下旬に全員に三者面談を行い、就農・就業の希望を把握するとともに就活を促した。</li> <li>ハローワークやワークサポートかがわと連携し、求人情報の提供や履歴書の書き方指導、模擬面接など、就職活動を支援した。</li> <li>今年度から新規就農・農業経営相談センターと連携して、農業法人等の求人情報の把握と活用を進めた。</li> </ul>	A	<ul style="list-style-type: none"> <li>1学年の三者懇談を6月に後ろ倒しし、学校に慣れてから行う。2学年については4月に実施し、指導の継続性と新年度からの就職活動の後押しを行う。</li> <li><u>新規就農・農業経営相談センター、JA香川県(アグリワーク)等関係機関との連携を強化し、求人情報の収集と学生への提供に努める。</u></li> </ul>	

重点目標	評価項目	具体的方策・評価指標等	経過・実績	評価	次年度の課題と改善策	外部評価委員の意見
		<p>2 授業や面談を通じた進路に対する早期動機付け</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>1 学年からキャリア教育や自己分析に基づく就職活動の土台作り</li> <li>1 学年から「就農・就業ガイダンス」等による企業研究機会の提供</li> <li>インターンシップや会社見学の積極的な実施への働きかけ</li> </ul> <p>●評価指標</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>進路決定率</li> <li>インターンシップ・会社見学の実施のべ人数</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>農業法人や農業関連企業を知るために、就農・就業ガイダンス講義の一環として、1・2学年合同で会社説明会を開催し、社長や人事担当者との面談できる機会を提供し、進路に対する早期動機付けを図った。また、比較的年齢の近いOBを招いて意見交換を行い、就農、就業に関する具体的なロールモデルを意識付けした。</li> <li>1 学年の「就農・就業ガイダンス」にインターンシップを組み込み、全員が農業法人、造園会社、林業組合で就活を経験する予定。</li> <li>2 学年においては、具体的な履歴書の作成方法や先進的農家の講話、農業士会やIFKなどの農業者組織や農地機構等就農時の相談機関を紹介したほか、新たに女性農業委員との意見交換を行った。</li> </ul> <p>●実績</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>進路決定率 89% (卒業予定者 27 名うち 24 名)</li> <li>インターンシップ実施人数 10 名 (のべ人数 12 名)</li> <li>会社見学実施人数 12 名 (のべ人数 17 名)</li> </ul>	A	<ul style="list-style-type: none"> <li>授業や面談を通じて、就職意欲の低い学生への働きかけや選択に迷っている学生への決断をサポートし、早期に各学生が進路の方向性を検討するよう促していく。</li> <li>引き続き、1 学年の「就農・就業ガイダンス」に授業の一環として<u>インターンシップを組み込み</u>、就活の取り組みを促す。</li> </ul>	
	2 就農支援	<p>●具体的方策</p> <p>1 就農を支援する施策の活用促進</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>就農を目指す学生・研修生に対し、各種給付金の事務手続き支援</li> <li>関係機関との連携強化による就農に向けた各種支援施策等の情報提供と活用支援</li> </ul> <p>2 就農意欲の向上対策</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>インターンシップや会社説明会等を活用した雇用就農の支援</li> <li>県内外の優れた農業者による講話を通じた就農意欲の向上</li> </ul> <p>3 就農相談の実施</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>営農計画の作成支援や関係機関と連携した就農支援活動の実施</li> <li>関係機関（普及センター、農業会議、農地機構等）と連携した切れ目ない支援</li> </ul> <p>●評価指標</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>就農を支援する事業の活用者数</li> <li>就農者数</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>「就農準備資金」については、7月に説明会、11月に準備状況を面談、2月に税務申告説明会を開催し、手続き等を支援した。</li> <li>J A香川県就農奨学金を、学生2名が受給している。</li> <li>独立自営就農を目指す学生・研修生には、早期に普及センターや市町に相談に行くよう進め、就農に当たっての具体的な準備等指導を受け、円滑な就農に繋がるよう働きかけた。</li> </ul> <p>●実績</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>農業法人への就職を希望する学生が会社見学やインターンシップを行いやすいよう、希望の農業法人などへ学校から受け入れを依頼し、職場体験を経てから応募する流れを作り、延べ10名の学生が8か所でインターンシップを行った。</li> <li>法人見学会（2回）、先進農家の講話、IFK や農業士等、先進農家から直接話を聞く機会を増やした。</li> <li>卒業・修了後に円滑に就農できるよう普及センターや農地機構と連携・情報共有を図った。</li> <li>農大将来ビジョンの実現に向け、就農に向けた積極的な支援が行えるよう、3月に関係機関を回り、定期的な個別相談会の開催を目指す。</li> </ul> <p>●実績</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>就農準備資金活用者数 担い手養成科2 学年 1 名(親元就農希望)</li> <li>技術研修科研修生 5 名(独立就農 5)</li> </ul>	A  A  B	<ul style="list-style-type: none"> <li>法人への雇用就農や独立を希望する学生や研修生については、在学中から各普及センターや新規就農・農業経営相談センター等との接点を持てるよう、<u>定期的な校内相談会の設定を検討</u>する。</li> <li><u>インターンシップ制度を活用しやすく要領の改正</u>を行う。</li> <li>農業経営者協議会、新規就農・農業経営相談センター、関係団体と連携して、<u>求人掘り起こしと学生・研修生と農業法人とのマッチング</u>を行う。</li> <li>就農希望者の在学中から切れ目なく支援できるよう、<u>普及センターや農地機構、J A等と連携して校内に就農支援チームの編成</u>を目指す。</li> <li>就農希望者の状況に応じた支援ができるよう、面談の機会などを利用して、学生・研修生の状況を把握する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>地域の専門商店がフランチャイズのコンビニ店に形態を変えたように、農業経営も農地やノウハウをパッケージにして提供するようにすれば、学生も就農し易くなり、継承も進むのではないかと。</li> <li>農業法人への雇用就農者が多い一方で、個人経営体（とくに果樹農家）では高齢化によるリタイアで事業継承が問題になっており、普及センター等からの情報共有により農地も含めて経営継承できる仕組みがあるとよい。</li> </ul>

